

ライフコース展望の多次元モデル

—自己決定理論に基づいて—

藤原善美

1. はじめに

成人への移行期である青年期は、ライフコース上の役割移行（学卒、就職、結婚等）を短期間の内に経験することが期待されている時期である。ライフコース上の変化は、役割の変化と捉えることもでき、役割移行過程は、ライフコース研究において主要な関心を集めている。役割移行のさいには、さまざまな葛藤が生じるが、特に、青年期では、役割移行の幅が大きく、また役割の種類も増えるので、焦燥感やストレスを伴うことが多い。

ライフコースとは、年齢によって区別された、生涯を通じてのいくつかの軌跡（トラジェクトリ）、すなわち人生上の出来事（events）についての時機（timing）、持続時間（duration）、配置（spacing）および順序（order）に見られる社会的パターンである、と定義される（G. H. Elder, 1985）。

Elderは、ライフコース理論の4つの原則を示しており、ライフコースの規定要因を考える上で不可欠なものとなっている。その4つの原則とは、①「歴史的時間と空間の原則」、②「人生におけるタイミングの原則」、③「リンクされた人生の原則」、④「人間の力の原則」、である。ライフコースの規定要因を考える上で、①「歴史的時間と空間の原則」が、もっとも重要であるとされており、他の3つの原則は、個人差を説明するために有用だとされている。

「歴史的空間と時間の原則」とは、個々人のライフコースはその背景によって形成される、ということである。行動は、時代と社会文化的環境・文脈によって決定されるとした。これは、従来の生涯発達心理学においては十分に考慮されなかった部分である。

「人生におけるタイミングの原則」とは、人生移行や出来事の発達への影響は、移行や出来事が人生においてどの時期に起こるかによって異なる、ということを示す。同じ出来事が、発達や年齢の違いによってそれぞれ別の意味をもつことが多い。

「リンクされた人生の原則」とは、ライフコースがさまざまな次元が相互作用している、ということを示す。すなわち、社会や文化、心理、歴史が統合され、相互に作用を及ぼしていくなかで、ライフコースは規定されているということである。

「人間の力（human agency）の原則」とは、個人が、不可変な社会的・文化的環境のなかで、自らの選択でライフコースを規定しうる、ということである。人は、戦争や、厳しい貧困のなかにおいても、自らの人生を切り開く力をもっているということである。

ライフコース理論の4つの原則のうち、「人間の力の原則」は、時代や文化に大きく影響されるライフコースについて、個人の選択ということに着目している。人間は、いかなる困難な状況においても、自らの選択によって、人生をよりよいものにすることができるのである。類似した観点では、動機づけのパラダイムで、自己決定理論がある (Deci & Ryan, 1985)。

自己決定したいという欲求が人間には存在し、その機会が失われると、動機づけや達成が低下し、非常に不健康な状態に陥る可能性が高い、といわれている (Deci, 1980)。人生において最も重要な決断であるライフコースの選択において、自己決定の度合いが非常に重要な位置をしめていることになる。したがって、この研究において、自己決定理論を主な機軸として議論をすすめることは、非常に有意義であると考えられる。

Deci & Ryan (1985) は、学習における動機づけを「自己決定の程度の高いものから、内発的動機づけ、同一化的調整、取り入れ的調整、外的調整、無力状態の順序で連続性のあるものとして捉える、自己決定理論 (Self-determination theory) を提唱した。後に、Vallerand & Bissonnette (1992) は、同一化的調整より高い外的動機づけとして、統合的調整があるとした。自己決定とは、自分の欲求の充足を自ら自由に選択することであり、「自律」ということばにも言い換えることができる。しかし、ここで留意すべきは、エリクソンの発達段階理論や、道徳の理論における「自律」とは根本的に異なる意味をもつということである。従来の動機づけのパラダイムは外発的動機づけ対内発的動機づけという二項対立の構図であったのに対し、むしろ両者を連続線上のものとして捉えている。

「無力状態 (amotivation)」は、外発的動機づけ、内発的動機づけとはまったく別の状態である。目的意識がなく、報酬の期待もないので行動はまったく自己決定されない。人は行動と結果の間に随伴性を欠くと無力状態になると考えられる。また、失敗経験や統制できない経験が無力状態を形成する。学習された無力感に近い概念である。日本で調査した場合、多く出現するとされており、青年の諸問題を考える上で重要な概念となっている。就職に関して、自分の進路をまったく分かっていない大学生などは、この段階にあるといえる。

「外的調整 (external regulation)」は、全く自己決定がされていない段階で、いわゆる外発的動機づけのことを指す。「親や先生に言われて勉強する」ような場合で、すべて外的な力によって行動が開始されるもので、本人自身が勉強しようという意思決定をしたものではまったくない。

「取り入れ的調整 (introjected regulation)」は、外的に調整されるのではなく、行動を自己調整できるようになる段階である。「不安だから勉強する」「恥をかきたくないから勉強する」のような場合で、勉強や学習それ自体が目的でないことはいうまでもないが、先の外的調整と異なるのは「勉強しよう」という自己決定が当事者側に一応できている。

「同一化的調整 (identified regulation)」は、自分の価値として同一視するもので「取り入れ的調整」より一層自己決定が肯定的に進んでいる。「自分にとって重要であるから勉強する」ような場合で、勉強することが何らかの手段であれ、自分にとって大切なことであるという自覚が個人内に成立すれば、他者に指図されずとも自分から学習を開始する。

「統合的調整 (integrated regulation)」は、Vallerand & Bissonnette (1992) によって加えられた段階である。喜んで行動し、自己調整は自己概念と一致する。問題の焦点は選択された外発的に動機づけられた行動がその個人の日常活動や価値づけられた目標とどのように適合するかにある。選択された行動と選択されなかった行動の間の調和の程度が統合の程度といえる。例えば、成績がよいことが重要であるという理由で試験のために勉強することに決め、何ら悩むことなく、他の楽しい活動に先行させる場合などである。

そして、「内発的動機づけ (intrinsic motivation)」は、もっとも自己決定的な段階である。「楽しいから」などの理由で行動する場合をさす。

本研究の被験者は、総合大学の大学生となっており、就職や、結婚など、成人として社会から求められる課題に直面しようとしている段階にある。ライフコースに関して、自己決定し、理想と現実の折り合いをつけ、実際の社会に自らの役割を位置づけていく過程における動機や、それに影響される精神的健康についての知見は、進路指導の現場において有用であるだろう。

2. 目的

青年期のライフコース展望は、主にどのような要因によって影響を受けるのか、あるいは与えるのか、について明らかにする。自己効力感、ジェンダー・アイデンティティー、就業動機などの様々な立脚点から、ライフコース展望の多次元モデルを提案する。その際に、以下のような仮説に基づいてモデルを作成した。

①「ライフコース展望の自律性の次元が高いほど、精神的健康にとってはよい影響を及ぼしている」。これは、自己決定理論において、自己決定の機会が失われると、非常に不健康な状態に陥る可能性が高い (Deci, 1980)、と述べられていることについての検証となる。②「就労働機が高いほど、自律性の次元は高くなる」。大学生のライフコース展望において、最も主要なものとなるのが、間近に迫っている就職に関することである。したがって、就労働機がライフコース展望の自律性に大きく影響していくものと思われる。未入職者が将来の仕事に関連してもっている動機が高いほど、自らのライフコースに関して、より自己決定的に展望する傾向があると想定した。③「自己効力感が高いほど、自律性の次元は高くなる」。進路選択に関連する概念として最も注目されているものの一つとして、自己効力感が挙げられる。自らの進路について、成功できるという予期の認知は、ライフコースを自己決定的に展望することを助けるのではないかと考えた。④「男性性が高いほど、自律性の次元が高くなり、女性性が高いほど、自律性の次元が低くなる」。東・今津 (1999) が、ジェンダー・アイデンティティーは自尊感情を規定する重要な一要因であると考え、検討してみた結果、生物学的性別にかかわらず男女共に、男性型の自尊感情が他のどの型よりもより高いとなった。したがって、ジェンダー・アイデンティティーと自律性の関係についても、同様な傾向があるのではないかと推測したのである。

これらに基づいて構想した因果モデルの観測変数は次のようになった。自律性の観測変数としては、

PMLSの各因子得点を用い、6段階の自律性を高群と低群に分けた。また、精神的健康の観測変数としては、GHQの要素スケールのひとつである「うつ傾向」の得点と、「STAI日本語版」の「A-trait」を主因子法による因子分析をして、因子負荷が高い項目を3つまで採択した。STAIは、1因子であることが先行研究で示されているので、因子数を1に固定した。その結果、特性不安の項目としては、項目9、項目15、項目17を観測変数とすることにした。就業動機の観測変数としては、就業動機尺度の下位尺度である「探索志向」、「対人志向」、「上位志向」、「挑戦志向」を用いた。また、自律性の高群と低群それぞれに影響すると想定される観測変数として、BSRIの男性性尺度と女性性尺度の各得点と、「進路選択に対する自己効力尺度」の単純合計得点を用いた。

3. 方法

3-1 被験者

被験者は、都内の4年制総合大学に在籍している大学生378名で、男性208名(55%)、女性170名(45%)。学年の内訳は、1年生162名(42.9%)、2年生128名(33.9%)、3年生56名(14.8%)、4年生20名(5.3%)、不明12名(3.2%)となった。平均年齢20.22歳。

3-2 尺度

ライフコース展望動機づけ尺度(藤原善美, 2003)。進路選択に対する自己効力尺度(浦上昌則, 1995)。BSRI日本語版(東清和, 1990; 1991/原著者S. L. Bem, 1974)。就業動機尺度(安達智子, 1998)。STAI日本語版・特性尺度(清水・今栄, 1981/原著者Spielberger, Gorsuch & Lushene, 1970)。日本版GHQ・うつ傾向尺度(中川・大坊, 1996/原著者D. P. Goldberg, 1978)。

それぞれの尺度と測定している内容について概説すると次のようになる。

ライフコース展望動機づけ尺度は、ライフコース展望の自律性を測定する尺度として、Academic Motivation Scale: AMS (Vallerand, 1992) や、Situational Motivation Scale: SIMS (Vallerand, 2000) などの自律性尺度を参考に作成された。

Taylor & Betz (1983) は、進路を選択する過程で必要な行動に対する遂行可能感である「進路選択に対する自己効力」を測定することを可能にした。進路選択に対する自己効力が高いと、進路選択行動が活発化し、努力をするという。浦上昌則(1995)は、Taylor & Betz (1983) の進路選択に対する自己効力尺度(Career Decision-making Self-Efficacy; CDMSE)を基にして、日本の現状に応じた尺度を作成した。

ジェンダー・アイデンティティー・タイプは、Bem Sex Role Inventory (BSRI; Bem, 1974) によって測定されるもので、男性性尺度得点と女性性尺度得点の組み合わせによって、個人をアンドロジニー(男性性・女性性がともに高い男女)、セックスタイプ型(男性性が高い男性・女性性が高い女性)、クロスセックスタイプ型(女性性が高い男性・男性性が高い女性)、未分化型(男性性・女性性がともに低い男女)の4種類に分類する。アンドロジニーは、さまざまな状況に合わせて、男性的にも女性的にもなりえるため、より適応的であると考えられている。BSRIは、東清和(1990; 1991)によっ

て邦訳され、BSRI日本語版が作成されている。

就業動機とは、未入職者が未来の仕事状況に関連してもっている動機、または、将来携わる職業的場面を想定した動機、と定義できる(安達, 1998)。就業動機は、探索志向・挑戦志向・対人志向・上位志向の4因子に分けることができる。「探索志向」は、将来携わる仕事に関する情報を収集するなど職業に対する積極的姿勢、「挑戦志向」は困難な作業に挑戦して仕事によって自己成長しようとする傾向、「対人志向」は、仕事を通じた人との接触を志向する傾向、「上位志向」は、社会的地位や名声を得ようとする傾向である。このような4因子に基づいた就業動機尺度が作成されている。

精神的健康に関する尺度は多く存在するが、主にうつ傾向と不安によって測定することが多い。

Goldberg (1978) は、GHQ 精神健康調査票 (General Health Questionnaire; GHQ) を開発している。日本語版 GHQ (中川・大坊, 1996) も作成されており、神経症症状および不安や社会的な機能の不全さを反映するものであり、神経症のみならず、緊張やうつを伴う疾患性を判別するのにすぐれている。要素スケールとしては、身体的症状、不安と不眠、社会的活動障害、うつ傾向の4つが挙げられる。うつ傾向を測定する尺度として、GHQ の下位尺度を用いることは有効であろう。

不安を測る尺度として、State-Trait Anxiety Inventory; STAI 日本語版 (清水・今栄, 1981 / 原著者 Spielberger, Gorsuch & Lushene, 1970) がある。この尺度においては、一時的な不安状態を示す状態不安と、比較的安定した個人内特性と捉えられる特性不安とに分けられている。

3-3 手続き

(1) 調査手続き

大学の講義中、ライフコースに関する意識調査の質問紙と、2回の予備調査をもとにして考案したライフコース展望動機づけ尺度、その他の関連概念に関する尺度を、授業中にいっせいに配布し、回収した。

(2) 分析手続き

データの分析においては、直接観測できない潜在変数を導入し、潜在変数と観測変数との間の因果関係を同定することにより社会現象や自然現象を理解するための統計的アプローチである共分散構造分析 (Structural Equation Modeling: SEM) により、ライフコース展望の多次元モデルを提案する。まず、自己決定理論や進路に関連する概念の先行研究を基にして、因果モデルを作成する。就業動機や、ジェンダー・アイデンティティー、自己効力が、ライフコース展望の自律性の高低に影響する、と考えた。そして、自律性の次元が高いほど、精神的健康にとって良い影響を及ぼす、と想定した。

4. 結果

Amos 4.0 を用いて、最尤推定法による構造方程式モデリングによって検討した。SEM を行った結果推定された因果関係のパスダイアグラムを Figure 1 に示す。

設定したモデルの CFI (Comparative Fit Index) は 0.963、RFI (Relative Fit Index) は 0.936 でもとに 1 に近い数値なので、モデルは比較的良いといえる。また、パス係数は標準化したものである。

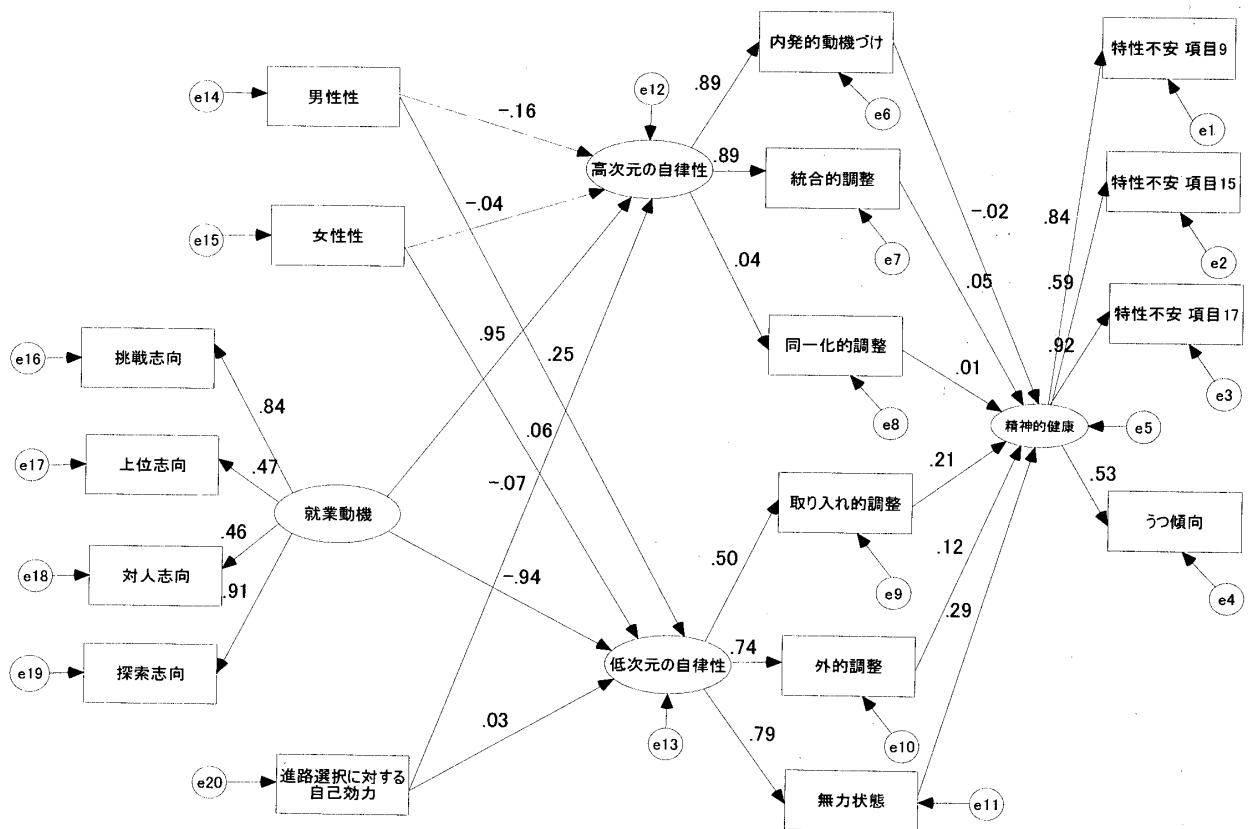


Figure 1. ライフコース展望の多次元モデル

標準化された因果係数の絶対値の大小や、正負を見ながら、因果関係を読み取っていく。

まず、自律性の6次元を表す観測変数から、不安やうつ傾向で示した精神的健康にかかっている係数を見ていくと、高次元の自律性を保持しているほど、係数は絶対値が小さくなったり、負になっていたりする。ライフコース展望の自律性の次元が高いほど、精神的健康にとってはよい影響を及ぼしていると言える。これは、自己決定したいという欲求が人間には存在し、その機会が失われると、非常に不健康な状態に陥る可能性が高い (Deci, 1980)、という自己決定理論の仮説にも適うものである。仮説①「ライフコース展望の自律性の次元が高いほど、精神的健康にとってはよい影響を及ぼしている」は、妥当であったといえる。

次に、男性性と女性性が、自律性に及ぼす影響を見ていく。男性性、女性性ともに、高次元の自律性への係数は負になっている ($\alpha = -.16$, $\alpha = -.04$)。これは、男性性や女性性は、高い自律性よりも、低い自律性への影響が強いとも言える。仮説④「男性性が高いほど、自律性の次元が高くなり、女性性が高いほど、自律性の次元が低くなる」は妥当ではないことがわかる。男性性・女性性ともに、ライフコース展望の自律性をむしろ低める要因となりうる。しかし、係数の絶対値が小さいので、今後の再検討が必要である。

就業動機については、高次元の自律性への係数 ($\alpha = .95$) と、低次元の自律性への係数 ($\alpha = -.94$) は、それぞれ正と負の絶対値の大きな数値となっている。就業動機は、ライフコース展

望の自律性に非常に大きな影響を与えていることになる。就業動機が高いほど、高次元の自律性は高くなり、低次元の自律性は低くなると言える。仮説②「就労働機が高いほど、自律性の次元は高くなる」については、あてはまっていた。

進路選択に対する自己効力感は、高次元の自律性への係数が $\alpha = -.07$ で、低次元の自律性への係数が $\alpha = .03$ となっており、絶対値は小さいものの、自己効力感が高くなるほど、高次元の自律性は低くなり、低次元の自律性は高くなることを示した。仮説③「自己効力感が高いほど、自律性の次元は高くなる」については、全くあてはまらなかった。しかし、係数の絶対値が小さいので、再検討が必要である。

5. 考察

今回の分析結果から、大学生のライフコース展望は、就業動機が高く、ジェンダー・ステレオタイプの価値観にしばられていない場合に、自律性の次元が高まることが分かった。自己効力感はあまり影響を及ぼしていなかった。また、ライフコース展望においては、高い次元の自律性を保持しているほど、精神的健康により影響を及ぼしていることが示された。

ライフコース展望の自律性を高める要因として、就業動機が大きな影響を及ぼしていた。未入職者である大学生が、将来の仕事状況に関連してもっている動機が高いことは、ライフコース展望における自律性に強い影響を及ぼすことを示す。ライフコースにおいて、職業領域の展望は、大学生にとって主要なものであるため、これは予想される結果である。就業動機とは、未入職者が未来の仕事状況に関連してもっている動機、または、将来携わる職業的場面を想定した動機、と定義できる(安達, 1998)。就業動機は、探索志向・挑戦志向・対人志向・上位志向の4因子に分けることができる。

しかし、ジェンダーに関する同一性や、自己効力感から自由であることが、展望するライフコースの内的な必然性に重要であるのは、どのような理由が考えられるだろうか。

まず、男性らしさや女性らしさを自分の中に取り込んでいる場合、ライフコースに関してもそれらの信念に適したものを選ぶ傾向があるということが考えられる。Bem (1981) は、ジェンダー・スキーマ理論において、性別された個人はスキーマを持っており、したがってそのような個人は自らの枠に囚われ、行動や思考が制限されてしまい、心理的にも安寧でないとした。この理論と同様、ライフコース展望においても、取り込まれたジェンダー・スキーマは自律性を低めてしまうようである。

また、進路選択に対する自己効力感はあまりライフコース展望の自律性に大きな影響を及ぼしているわけではないが、わずかながら、自己効力感が高いことは、自律性を低めることがわかった。これは、予想に反する結果であったが、強い自己効力をもっているからといって、ライフコース展望の自律性を高めることにはならないということになる。自己効力感という概念は、Bandura (1977) によって提唱されたもので、ある行動が自分にうまくできるかどうかという予期の認知されたものであり、行動と直接的な関係を持つと仮定されている。その上、どれくらい努力をするか、困難に直面した際にどれくらい耐えうるかを決定するとされる。さらに能力との関連においても、強い自己効力をもつ

人間は、たとえ限られた能力であっても、自分の能力をうまく働かせ、さらに努力するとされる。しかし、この研究においては、ライフコースの自律性にとって、自己効力感は、あまり影響していないということが示された。

一方で、ライフコース展望においては、高い次元の自律性を保持しているほど、精神的健康による影響を及ぼしていることが明らかになった。

しかし、ライフコース展望が低いと、うつ傾向や不安が高い傾向があるからといって、日本的な価値観を考慮すると、必ずしも悪いことではないかもしれない。精神的健康には、正確な自己客観視が不可欠であるとされてきたが、Taylor (1989) はそれに異論を唱え、人生において困難に遭遇した際に、自分に都合よく歪めた自己概念である「ポジティブ幻想」が、よい方向へ人を動かすとした。自己に関するポジティブな幻想が、精神的に健康な人の自己認識の在り方であるとしたのだ。しかし、精神的健康は、文化的社会的背景と密接に関連している。日本においては、適応的な人においても自己概念が否定的である場合が多く、自己卑下傾向や消極的肯定傾向が見られる (遠藤由美, 1995)。したがって、日本人の精神的健康は、欧米人のそれとは異なったものとして捉える必要がある。

自己決定理論によると、行動が自己決定的になされているほど、精神的健康にとって良い影響を及ぼしていることになる。無力状態や外的調整の段階でライフコースを展望している場合には、精神的にかなり不健康な状態になると考えられる。反対に、「楽しいから」など内発的な動機で展望する場合には、不安やうつ傾向があまり見られないということになる。しかし、職業生活や家庭生活などすべてを、このような楽観的な理由から選択できるわけではない。したがって、実際には、ライフコース展望においては、様々な段階の自律性が入り混じっていることが多いだろう。そのような中で、いかに自律性を高めていくかが、進路指導の現場において重要な問題であるといえる。

ライフコースの多次元モデルは、ライフコース展望に影響する変数と、ライフコース展望の自律性を示す変数と、精神的健康の3層に分けられた。しかし、実際には本研究で取り上げた要因だけでなく、さらに多くの要因が存在していると思われる。ライフコース展望に関係する要因についての再検討が必要であろう。今後の課題としては、これらの相互の関係を見ることにより、進路指導の現場において、ライフコース展望の自律性の段階を高める方法に関する研究が必要である。青年期における、最も重要な課題のひとつである進路選択において、有益な知見となりえるであろう。

付録

【テキスト出力の結果】

現行モデルには次の変数があります。

内発	観測される	内生変数
男性性	観測される	内生変数
女性性	観測される	内生変数
対人志向	観測される	内生変数
上位志向	観測される	内生変数
挑戦志向	観測される	内生変数
探索志向	観測される	内生変数
無力	観測される	内生変数
外的	観測される	内生変数
取入れ	観測される	内生変数
うつ傾向	観測される	内生変数
同一化	観測される	内生変数
自己効力	観測される	内生変数
統合	観測される	内生変数
ATRAIT15	観測される	内生変数
ATRAIT17	観測される	内生変数
ATRAIT9	観測される	内生変数

高次元の自律性	直接観測されない	内生変数
低次元の自律性	直接観測されない	内生変数
精神的健康	直接観測されない	内生変数

就業動機	直接観測されない	外生変数
e12	直接観測されない	外生変数
e13	直接観測されない	外生変数
e19	直接観測されない	外生変数
e18	直接観測されない	外生変数
e17	直接観測されない	外生変数
e16	直接観測されない	外生変数
e15	直接観測されない	外生変数
e11	直接観測されない	外生変数
e5	直接観測されない	外生変数
e14	直接観測されない	外生変数
e20	直接観測されない	外生変数
e8	直接観測されない	外生変数
e7	直接観測されない	外生変数
e6	直接観測されない	外生変数
e9	直接観測されない	外生変数
e10	直接観測されない	外生変数

e2	直接観測されない	外生変数
e3	直接観測されない	外生変数
e1	直接観測されない	外生変数
e4	直接観測されない	外生変数

モデルに含まれる変数の数:	41
観測される変数の数:	17
観測されない変数の数:	24
外生変数の数:	21
内生変数の数:	20

パラメータの要約

	係数	共分散	分散	平均値	切片項	合計
固定されたもの	24	0	0	0	0	24
ラベルされたもの	0	0	0	0	0	0
ラベルがないもの	24	0	21	0	17	62
合計	48	0	21	0	17	86

標本数 = 378

最小化履歴

反復	乖離度
0	3292.698
1	1980.578
2	1545.947
3	1188.811
4	949.219
5	744.956
6	649.498
7	609.388
8	588.268
9	570.135
10	562.389
11	559.975
12	559.729
13	559.727
14	559.727

標準化係数

		推定値	
高次元の自律性	<-	男性性	-0.158
高次元の自律性	<-	女性性	-0.042
高次元の自律性	<-	就業動機	0.954
低次元の自律性	<-	男性性	0.246
低次元の自律性	<-	女性性	0.063
高次元の自律性	<-	自己効力	-0.066
低次元の自律性	<-	自己効力	0.032
低次元の自律性	<-	就業動機	-0.941
内発	<-	高次元の自律性	0.890
無力	<-	低次元の自律性	0.787
外的	<-	低次元の自律性	0.741
取入れ	<-	低次元の自律性	0.505
同一化	<-	高次元の自律性	0.044
統合	<-	高次元の自律性	0.894
精神的健康	<-	同一化	0.012
精神的健康	<-	取入れ	0.207
精神的健康	<-	外的	0.120
精神的健康	<-	統合	0.054
精神的健康	<-	内発	-0.016
精神的健康	<-	無力	0.292
対人志向	<-	就業動機	0.464
上位志向	<-	就業動機	0.470
挑戦志向	<-	就業動機	0.843
探索志向	<-	就業動機	0.911
うつ傾向	<-	精神的健康	0.525
ATRAIT15	<-	精神的健康	0.592
ATRAIT17	<-	精神的健康	0.917
ATRAIT9	<-	精神的健康	0.836

引用・参考文献

- 安達智子 (1998) : 「大学生の就業動機測定を試み」, 『実験社会心理学研究』, 38, 2.
- 東清和 (1990) : 「心理的両性具有 I — BSRI による心理的両性具有の測定」, 『早稲田大学教育学部学術研究 (教育・社会教育・教育心理・体育学編)』, 39, 25-26.
- 東清和 (1991) : 「心理的両性具有 II — BSRI 日本語版の検討」, 『早稲田大学教育学部学術研究 (教育・社会教育・教育心理・体育学編)』, 40, 61-71.
- 東清和・今津芳江 (1999) : 「男性性・女性性と社会的自尊感情との関連性」, 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第10号
- Bandura, A (1977): "Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavior change", *Psychological Review*, 84, 191-215
- Bem, S. L. (1974): "The measurement of psychological androgyny", *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Deci, E. L (石田梅男訳, 1985, 『自己決定の心理学: 内発的動機づけの鍵概念をめぐる』, 誠信書房)
- Deci, E. L (桜井茂男訳, 1999, 『人を伸ばす力: 内発と自律のすすめ』, 新曜社)
- Elder, G. H. (1985): *Life course dynamics: trajectories and transitions*, 1968-1980, Cornell University Press
- 遠藤由美 (1995) : 「精神的健康の指標としての自己をめぐる議論」, 『社会心理学研究』, 11, 2.
- 藤原善美 (2003) : 第6章「青年期のライフコース展望」, 『大学生の職業意識の発達』, 東清和・安達智子編著, 学文社
- Giele, J. Z. and Elder, G. H. (1998): *Methods of life course research: qualitative and quantitative approaches*, Sage Publications
- Goldberg, D. (1978): *Manual of the General Health Questionnaire*. Nfer-Nelson.
- Guay, F. Vallerand, R. J. and Blanchard, C. (2000): "On the Assessment of Situational Intrinsic and Extrinsic Motivation: The Situational Motivation Scale (SIMS)", *Motivation and Emotion*, Vol. 24. No. 3, 2000
- 速水敏彦 (1995) : 「外発と内発の間に位置する達成動機付け」, 『心理学評論』1995, Vol. 38, No. 2
- 川久保美智子 (1995) : 「日本女性のライフ・コース—理想と現実」, 『関西学院大学社会学部紀要』73. 1995. 10
- 正岡寛司編 (1997) : 『大学卒業、そしてこれから「からだ・こころ・つながりの発達研究」報告書』, 早稲田大学人間総合研究センター研究プロジェクト「社会変動と人間発達」
- 森岡清美・青井和夫 (1991) : 『現代日本人のライフコース』, 日本学術振興会
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1996) : 『日本版GHQ 精神健康調査票手引 (改訂版)』, 日本文化科学社.
- 生活科学研究所 (1985) : 『女性の生き方と今後のライフコース』, 総合研究開発機構
- 清水秀美・今栄国晴 (1981) : 「STAIT-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成」, 『教育心理学研究』1981, 29 (4)
- Spielberger, Gorsuch & Lushene (1970): *Manual for State-Trait Anxiety Inventory (Self-Evaluation Questionnaire)*. Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press.
- Taylor, K. M. & Betz, N. E. (1983): "Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision", *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81
- Taylor, S. E. (1989): *Positive illusions: Creative self-deceptions and healthy mind*. Basic Books.
- 豊田秀樹 (1998) : 『共分散構造分析・入門編』朝倉書店
- 豊田秀樹 (2000) : 『共分散構造分析・応用編』朝倉書店
- 浦上昌則 (1995) : 「学生の進路意識に対する自己効力と進路成熟の関連」, 『教育心理学研究』1995, 42
- Vallerand, R. J. (1989): "Vers une methodologie de validation transculturelle de questionnaires psychologiques : Implications pour la recherche en langue francaise (Toward a cross-cultural validation methodology for psychological scales: Implications for research conducted in the French language)", *Canadian Psychology*, 30, 662-680

-
- Vallerand, R. J. (1992): "The Academic Motivation Scale: A Measure of Intrinsic, Extrinsic, and Amotivation in Education", *Educational and Psychological Measurement*, 1992, 52
- Vallerand, R. J. and Bissonnette, R. (1992): "Intrinsic, Extrinsic, and Amotivational Styles as predictors of Behavior: A Prospective Study", *Journal of Personality*, 60: 3, September 1992
- 若松素子 (1998) : 「女性の仕事・ライフコースと大学」, 『発達』 19 (76) 1998. 10